

曾於文藝

「題字」
 末吉文化協会会員
 瀬戸口 淳民 氏

俳句

千草俳句会

ろう梅の香りまとひて園めぐる

川辺 良彩

池の鴨みな風に向き波にのり

千田 茂子

枯菊を燃やせばかすか匂ひ来る

児玉 タエ子

大隅俳句会

靴底の冷え込み知るや霜柱

穎娃 晴美

七輪に湯気立つ薬缶の店

川崎 陵子

槌音の響く山里日脚伸ぶ

岩重 みどり

短歌

末吉短歌会

玄関に置かれしままの亡母の杖

あるじ待ちつつひと巡り過ぐ

泊 康

うぶすなの杜のきざはし登りゆく

傷つき易きナルシズムに

長倉 佳津子

砂の粒押し上げ押し上げ湧き出づる

水の命のたくましきかな

宝蔵 弘二

大隅短歌会

ひい孫の無事に生れることのみを

指折りて待つ神に祈りて

安藤 フチ子

雨にぬれし径の落葉がしつとりと

靴にまつわりどこまで一緒

伊勢 タミ子

木枯らしが昨日すさびし公園は

落葉と人語の吹きだまりなり

川辺 玉枝

財部短歌会

まだ若いわが身励まし遊歩道

人影かすかに朝霜を踏む

永岡 冨子

広き田は白鷺遊ぶなり蒨田の後

農夫の苦勞をしのげせ

橋口 貞男

西日背に孫と散歩の影長し

季節のうつろい語つ帰る

川俣 若

高齢者が茶話会でうたう童謡は

少女のごとく声が弾みて

児玉 次雄

恙なく過ぎたるひと日夕暮れの

庭に耀ふ石落の花

杉村 リカ

冬の田に人影ひとつ動かざり

北風の中静かに眠る

祝迫 道雄

ほとばしる児らの息吹きのマーチング

一糸乱れずホールを湧かす

井上 澄子

八十路越え忙しき夫の十五種を

越える野菜は試験場の如し

瀬戸口 芳子

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

老し合わん どもこも目立つ

女房ん衣装

浜田 一好

何処へ行つも 和服で目立つ

麓奥方

森山 厚香

目立つごろ 派手な格好して

老しや隠ぎつ

桐野 奈世

光い切つ 人混け目立つ

主人が禿頭

鈴木 一泉

大隅薩摩狂句会

良か挨拶つ すち思たや

吃いてつ

山田 竜生

小もなつた 母親ん挨拶が

身体い沁ん

福元 多喜子

義理チヨコて 青年ん心を

もて遊つ

小倉 りんりん

寝とぼけが 冷て便座で

目が覚めつ

西山 美代子